

**立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）**  
**大学院生研究**  
**2004 年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院	文学	研究科	ドイツ文学	専攻
<b>指導教員</b>	所属・職名		氏名		
	文学部 教授		副島 博彦 印		
<b>自然・人文の別</b>	自然	・ (人文)	<b>個人・共同の別</b>	(個人)	・ 共同 名
<b>研究課題</b>	近代的自我像における交際術の影響日独比較 —クニッゲの交際者像を手がかりに—				
<b>研究代表者</b>	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	文学研究科ドイツ文学専攻 博士課程後期課程2年		吉村 暁子 印		
<b>研究組織</b>	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
<b>研究期間</b>	2004 年度				
<b>研究経費</b>	200 千円				

**研究の概要** (200~300 字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は人間の社交生活という文化的な営みにおける主体を、近代の日本とドイツ語圏の礼儀作法や処世術を説く実用書の有様を比較・分析することによって、より明らかに描き出そうとするものである。ここで言う実用書とは、現代風に言えばいわゆる大衆向けの交際や出世のためのマニュアル本、ハウツー本を想定している。そこでまず 18 世紀ドイツの啓蒙家クニッゲ (Adolph Freiherr von Knigge, 1752-1796) とその主著『人間交際術』 („Über den Umgang mit Menschen“, 1789) を研究対象としてとりあげた。啓蒙思想を背景とするこの書は、ヨーロッパの礼儀作法や処世術を扱った数々の書物のなかでも、とくに市民階級をその読者対象に含むものとして注目すべきものと考えられる。〈演技〉と〈実用性〉をキーワードとして同書のコンセプトを把握することによって、ドイツ近代化の時代における実用書とこれが説く交際時の技術の位置づけを試みた。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ クニッゲ ] [ 社会的演技 ] [ エゴイズム ]

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、多文化共生的思考を求められている現代社会のコミュニケーションをめぐる状況を背景として、人間の社交生活という文化的な営みにおける主体の在り様を、近代の日本とドイツ語圏の礼儀作法や処世術を説く実用書の有様を比較・分析することによって、より明らかに描き出すことにある。なかでも 1788 年に『人間交際術』を著したクニッゲは、その著者名が現代ドイツにおいて礼儀作法書を表す普通名詞として機能している点からも非常に興味深い研究対象といえる。だがクニッゲに関する研究はドイツでも近年になって本格化し始めたばかりで、日本への紹介も遅れている状況である。

これを踏まえて今年度は、クニッゲとその主著『人間交際術』が啓蒙時代の思想状況における位置づけについて研究を行った。その際とくに注目したのは、交際術(処世術)に対するクニッゲの考え方であるが、それはクニッゲの『人間交際術』が、社会生活における人間の振るまい方の規範を示す様々な書物にとってひとつの転換点であったと考えられるためである。貴族階級だけでなく市民階級を交際相手に含み、他者との幸福なる公正な共生を志向した交際術を示していること、および交際の状況を網羅的に取り上げ、文学でも哲学でもなく儀礼的ルールのみを示したものでもない現代の実用書的傾向を含んでいると考えられること、つまりノルベルト・エリアスの宮廷内部での礼儀作法を超えて、社会生活全体に広がった人間関係内での行動規範が問題となっているのである。行動規範の根拠となるのは、この場合宗教や道徳よりもむしろ交際者自身にとっての現世的利益である。そこで社交の場におけるエゴイズムの発露としての社交というテーマからアプローチを行った。利己主義的性質を批判的に指摘されるはずの社交的振る舞いに対するクニッゲの評価を分析することによって、クニッゲに特徴的な思考の詳細を明らかに出来ると考えた。そこでルソーの『エミール』に見られる社交批判をもとに以下の研究を行った。

1930 年代以降、ドイツでもルソーとクニッゲの関係、とくにルソーからクニッゲへの影響については幾つか研究が成されている。そこでは、『告白』の翻訳や長編小説内で主人公にルソーを読書体験させるという受容の仕方のほか、主に政治的・教育的思想の分野での影響関係に関する報告が主であった。そこで当研究では、ルソーの『エミール』における自己中心的な社交的演技への批判をもとに、その重要なキーワードである〈自己愛(amour de soi)〉と〈利己愛(amour-propre)〉に注目した。このキーワードをもとに、クニッゲにおける交際の場における自己中心的振る舞いへの批判を洗い出し、ともすると曖昧で理論に基づかない不確かなものと捉えられるクニッゲの交際に対する考え方を徹底的に考察していった。『人間交際術』には交際相手としての自己、家族、友人、身の回りの様々な職業人、宮廷人等について個別の特徴が記され、いかなる交際態度をもって他者と相対するべきかといういわばハウツー的助言が示されている。その根本にあるのは自己と他者の幸福なる共生である。しかし交際の場では自己の現世的利益志向のために外面的振る舞いと内面的心情の分離がしばしば起こるとされ、社交的振る舞いは交際相手に対して演技的な性質を持つこととなるといえる。社交におけるこのような振る舞いを、ルソーは〈利己愛(amour-propre)〉に基づく不誠実な態度として批判する。ルソーの背後にはフランスの「自己へ向かう愛情」をめぐる議論の潮流があるのだが、これを確認する一方、公正なる調和的交際を理想とするクニッゲの場合に利己主義的な振る舞いがいかに評価されるのかについて論じた。その際には、キケロやエラスムスやカスティリオーネ、デラ・カーサ、グラシアン等に代表される „Anstandsliteratur“ (「振る舞いの文学」) と、その一部を成しフォン・ロールらに代表される „Komplimentierbuch“ (「儀礼の書」) の定義を確認し、適正な(decorum)振る舞いが徳(hohestum)と結びつく伝統的な「振る舞いの文学」のいわば到達点として考えられた『人間交際術』を、むしろ近代への転換点とみなすことを前提とした。そして『人間交際術』内においてクニッゲが批判する利己的な振る舞いに関する記述を統計的に洗い出した結果、Eigennutz/ eigennützig 等が頻繁に使用されていることが見いだされた。これらの語は輸入された語である<selbst->よりも「自分」へと物事を引きつける意味の強いゲルマン語由来の接頭辞<eigen->を持つ。これらの語を使うことによって、クニッゲが出来事や状況をすべて自己に関係づけようとする態度を批判していることを指摘した。上記の研究を進めることによって、ルソーとクニッゲの比較が意味を持つのは、両者間の影響関係においてよりもむしろ「自己中心性」という行為の評価をめぐる議論においてであることがさらにはっきりした。カントの『実用的見地における人間学』にも見て取れるように、「自我」の理念的在り方と現実的な在り方の差が社交生活のなかでより際だって見えてくることに対して、啓蒙時代の思想家たちは敏感に反応していたのであった。クニッゲもまたそういった問題設定のなかで実践的理想的自己像を『人間交際術』のなかで描いて見せたと言える。さらに、臨機応変に表出される自己像の統制の手続きが自他の幸福なる共生を目指し

**研究成果の概要 つづき**

て誠実な心から行われるのであれば、他者を欺く振る舞いとしての非難を浴びるものではないと捉えている点は、自己の振る舞いに関して現実に即した実際の視座が倫理的根拠付けに勝っていることを表していると言えよう。

なおこの研究については、2004 年度秋季日本独文学会での口頭発表と立教大学大学院ドイツ文学専攻院生論文集《WORT》への論文執筆（ドイツ語）という形で成果を発表した。

上記に加え、コミュニケーションの一場面としての社交という状況における言語的および非言語的振る舞いに規範を設けることについては、「善く生きる」ための技術として倫理的に議論されてきた一方で、実践的知識集としてその都度編まれてきたといういわばクニッゲの背景を確認し、そのおおよその流れを把握した。この両観点は入り交じりつつ、キケロ『義務について』、アリストテレス『ニコマコス倫理学』、トマージウス『倫理学』『宮廷哲学入門』、カント『実用的見地における人間学』、シュライアーマッハー『社交的振る舞いについての試論』など他多数の著者に論じられてきた。社交理論とも言うべきこのテーマは、とくにドイツ絶対主義の時代に宮廷の高級官僚職を貴族が占めるようになったときに盛んに論じられた。トマージウスが大学ではじめてドイツ語で行った講義は宮廷での振る舞い方を扱っていた。その模範となったのはフランス宮廷であり、その傾向がしばらく続いていたことは、クニッゲが自分の描こうとしたのはフランスでいう「作法のエスプリ (esprit de conduite)」であると述べていることからわかる。宮廷では社交的で典雅な振る舞いが評価の基準であったが、次第に交際者の振る舞いの演技性が問題となる。内面の自己と外面的振る舞いの不一致という不誠実さが批判され、18 世紀には公正で自然な振る舞い、つまり「対等性の感覚」(ハーバーマス) が社交に求められるようになった。クニッゲも世間での自他の正当的承認を交際の目的として、『人間交際術』において社交の場における自己の行動統制を勧めるのである。つまり内面的統括者としての自己が個別的状況に応じて外面的行動をコントロールすることになる。これはリチャード・セネットによればディオドロ的演技と言えらるだろうが、利己心/エゴイズムが公正さと対立するとき、分裂に向かうように見える交際者の自我は、自己自身と対決することになる。この自我を、人間が神という真理と別離し、自己との関係に向き合ったときに生まれる近代的自我像であると考え、クニッゲがフランス革命の前年という時代に『人間交際術』を著したことの重要性が感じられる。

以上の研究と並行して、2004 年 9 月に渡独し、主に 19 世紀代後半から 20 世紀初頭にかけて発行された日本では入手困難な礼儀作法集および処世術集の収集を行い、コピーあるいはパソコンへの打ち込み作業により以下の資料を手に入れることが出来た。

v. Fels: Der gute Ton. (1887), F. Junker: Das feine Benehmen in Gesellschaften. (1887), A. Portig: Ändert eure Geselligkeit. (1889), F. Ebhardt: Der gute Ton in allen Lebenslagen. (1892), H. Schramm: Der gute Ton. (1892), W. Jerwitz: Moderne Anstands-Lehre über den Umgang in der gesellschaft. (1896), F. Albrecht: Der Ratgeber für den Guten Ton in jeder Lebenslage. (1899), H. Schwarz: Das sittliche Leben. (1901), Was im Jahr 1878 gut zu thun ist. (発行年不明)

同様の問題設定により、以下の近代日本の礼儀作法集、処世術集の収集にも務めた。

槐堂居士『処世交際法』(明治 26)、渡辺為蔵『処世小訓』(明治 34)、啓文社編『処世指針 国民実鑑』(明治 44)、野間清治『処世之道』(昭和 5)、浅野弥太郎『処世哲学』(昭和 4)、矢野正世『処世社交術』(昭和 3)

以上の資料に関しては、来年度以降の研究で整理・活用する。